

BB-2

NO. 2

原本

“都内に於ける納豆売の少年少女の実態調査報告”

——年少街頭労働者実態調査のうち——

1950年2月

労働省婦人少年局

1. 調査の目的

此の調査はさきに行われた、靴店、新聞売の年少街頭労働者の実態調査について、右二業種以外のものについて、昨年12月から本年1月にわたって、全国的に調査したもののうち、東京都における納豆売りの調査の概要を中間報告として取りまとめたものである。

したがって、靴店、新聞売の調査と同じように、年少者の街頭労働の必然性や労働関係、労働条件などの現実を把握し、有効な対策の基本資料を提供する目的で行われた。

2. 調査の方法

この調査は本谷婦人少年局職員が東京都内の18才未満の納豆売の年少者を対象として直接面接して個別の調査を行ったのであるが、調査の技術上の都合から都内の納豆製造組合に加入している製造業者、卸業者（仕入れ者が概ね5名以上集るもの）のところに、仕入れに集ってくる年少者について、仕入時間を利用して行った。したがって組合に加入していない業者から仕入れる年少者は全く把握されていないので、ここに掲げた数が東京都内における納豆売の全部の数でないことは勿論である。

3. 調査の結果

a 年令別（数之年）男女別反の総数

把握された熱数は79人でそのうち、男76人 女3人である。

女子が非常に少ないが、この現象は靴店 及び新聞売の場合も同じであり、これは街頭労働の一般的現象である。

年令別 男女別 熱 数

年令別とみると、15才 16才	合 計	男	女
10才未満			
のそれより19名を筆頭と	10才 1 (1%)	1	
14才の15名以下 13才 17才	11才 2 (3%)	2	
12才という順であり最年少	12才 5 (6%)	5	
者は10才に属している。	13才 8 (10%)	8	
この年令は丁度新報 中学12	14才 15 (19%)	15	
3年生から入学校在学中の少年少女である。	15才 19 (24%)	19	
約豆売りの数は夏季休暇の場合急激に増加し、厳冬の頃は減少すると、短い期間についてみても1ヶ月のうち	16才 19 (24%)	19	2
米の配給のありとを、無い時算によつても左右される。	17才 8 (10%)	7	1
業者が集まる年少者も多い時は1軒の業者にならぬ人から	18才 2 (3%)	2	
100人も集り、少ない時は数名に減少するという状況で、	合 計 79 (99%)	76	3

その数は極めて浮動的である。

(参考) 納豆製造組合員及び年少者数

区 名	組合員数	年少者数	区 名	組合員数	年少者数
豊島区	3	40	荒川区	1	1
江戸川区	3	53	足立区	6	1
杉並区	10	71	台東区	1	0
中野区	1	15	千代田区	1	0
練馬区	1	5	葛飾区	2	0
西川区	1	5	目黒区	2	0
北区	3	70	港区	1	0
江東区	2	7	世田谷区	1	0
墨田区	6	3	計	45	271

- 備考 1. 納豆製造組合は新旧の2組合があり、この数は両組合を含めて知り得る数を掲げた。
2. 年少者数というのは製造業者の所に納豆を仕入れに集ってくる納豆売の年少者の数であり、昨年12月各業者から聞きこんだ数である。
3. 年少者数のないところは業者が休業中とか、年少者が来ないというものである。

4. 家庭の状況

家庭の状況

また、年少者の待遇

に出て何かがあればならぬ

いかという事は、もつ

とも深く家庭の状況が

関連してくるものと思

われる。

とくに家庭の全計の中

心となる者の収入の高が年少者に納豆売りを余儀なくさせる重要な原因となるのではないかという考えから、この点を細かく把握したいと考えたが、年少者には充分答えられ

	両親関係		
	合計	男	女
父なし	18 (23%)	18	0
母なし	4 (5%)	4	0
両親なし	1 (1%)	1	0
両親あり	56 (71%)	53	3
計	79 (100%)	76	3

	有業者関係		
	計	男	女
有業家庭有	77	76	3

ず、したがって、これら扶養者の収入の高を正確に知る事ができなかった。

A 両親との関係

父のいないものは18人で23% 母のいないもの4人
両親のいないもの1人で両親又は片親のいないものは合
せて全体の29%に当り、両親の揃っているものは
56人で71%である。靴店まや新聞売りの場合は
両親又は片親のいないものは55.8%で納豆売りのほ
う格に低い率を示し、両親の揃っているものは41.9
%であつた。

しかしながら、同じく両親又は片親のいないという條
件でありながら、一方は靴店まや新聞売りとなり、
一方は納豆売りとなるという相違は、親のある、な
しをけによつては説明しづけることはできない。

B 生計の中心

家庭の生計の中心についてみるならば、本人がその
中心をしめているものは僅に3人であり、その比率
は3%である。

さきに調査した新聞売りと靴店まやは、生計の中心
が本人であると積極的に答えたものが、東京都の場合

合は60人中20人で33%を占め、全国でも51人中17人で32%を占めている。従つて納豆売りの少年少女の方が、靴磨きや新聞売りの場合より一般的にみればその家庭が経済的にいく分良い状態にあるという事が見えよう。

又有家族についてみると、有家族をもたないものは1人もいない。たとへ父親が失業していても、他の子供が職を持つてゐると

生計について			
	計	男	女
本人が中心	3(4%)	2	1
他の者が中心	76(96%)	74	2
計	79(100%)	76	3

ある。

貧困の家庭では、何さうな能力のある者は皆それぞれの仕事をもつて、おるに生計をカバーし合つてゐるのであるが、靴磨きと新聞売りの家庭と納豆売りをしてゐる子供の家庭とでは、有家族が持つてゐる職業の分野や人数の比率に相当の差がみとめられるようである。

例えば、靴磨きや新聞売りの家庭では、全体の50%が子供と同じ様に靴磨きや新聞売りを家族協同してやつてゐる。しかし納豆売りの場合は、子供と同じ様に納豆売りの傍初のみで生計を維持してゐるものは殆んどみられない。

これは納豆売りの収入では家業の生計を維持していくには足りないということが主なる原因であろう。

生計の中心者の職業分類

職 業	金 店	公 務 員	人 大	工 人	商 店		銀 行	教 師	洋 行
人 数	30	9	7	6	4		2	2	1
職 業	ホ ン ン ベ ー 屋	八百屋	下駄屋	ア ー 屋	石 屋	商 務 理 理	火 災 病 氣	不 明	
人 数	1	1	1	1	1	1	3	3	6

住 居

住居については全部のものが家族と同居している。

先に発表した靴店と新聞賣の中には仲間と同居しているものが、全国では551人中874(13%)であるが、東京都には60人中18人(30%)で、住居不定のものが、全国では99人をしめしているのと較べると、とくに家族と一緒に住んで居るという環境に恵かれている。

5 住 年 数

靴店や新聞売の場合は、義務教育年令にありながら通学
住 年 数

し ているものは、さ	計	男	女
めて少く、僅かに153%	1 (1%)	1	
に過ぎない。しかも通	4 (6%)	5 (5%)	
学しているものの大	5 (6%)	5	
部分の新聞売の年少	6 (12%)	9	
	7 (33%)	25	
	8 (25%)	20	
者であるに対し、靴	9 (16%)	10	3
豆売の場合は、通学し	10 (14%)	1	
ていないものは小学			
校4年生に1名あつたを			
けてある。			
新制中学1年生、次が2年	合 計 77 (100%)	76	3

サ

生、3年生という順である。

4. 労働時間及び労働形態

納豆を売り歩く時刻は、朝と夕方とある。朝のものは午前5時頃から8時30分頃迄、夕方のものは午後4時頃頃から7時頃までである。

朝だけ売る者は46人で58% 夕方だけの者は6人で8% 朝と夕方の両方売る者は27人で34%である。

1日の働く時刻と時間

労働時間について	区別	時間	計	男	女
いてみると、	朝のみ	1時前~2時前	24	24	
		2 ~ 3	21	21	
		3 ~ 4	1	1	
全体を通じて		計	46	46	
1時間から2時間のもの	夕方のみ	1 ~ 2	2	2	
		2~3 ~ 4	0	0	
		4時前以上	4	1	3
		計	6	3	3
最も多く44%を占め次に2時間から3時間のものが3	朝、夕方	1時前 ~ 2	9	9	
		2 ~ 3	7	7	
		3 ~ 4	4	4	
		4 ~ 5	3	3	
		5 ~ 6	3	3	
		6時前以上	1	1	
		計	27	27	
		合計	79	76	3

労働時間数

5%で両者で

	時間	人数	%
全体の80%に近い率を示す。	1 ~ 2	35	44%
	2 ~ 3	28	36%
T.O	3 ~ 4	5	6%
	4 ~ 5	7	9%
	5 ~ 6	3	4%
	6時前以上	1	1%
また1日4時	計	79	100%

間以上(朝、夕)初くものは通算して)初くものが11人で
 14%居るが、就労時間と通算すると労初基準法の満15
 オ未満の児童は就労時間を通算して1日7時間以上労初
 させてはならないという。基準を超えることになる。夕
 方をけ初めている。ある16才の少女は毎日5時頃から、
 7時、10時頃まで売り歩き 平均30個位を売っている。
 この少女は父が工場に勤務しているが給料の滞拂のため。
 この少女と弟が初いで生計を解つてゐるのである。

7/ヶ月収入

1ヶ月収入

1ヶ月の収入は最低		計	男	女
	500未満	1 (1%)	1	
500円未満の者1名	500以上	14 (18%)	14	
最高を1000円以上の3名で	1000円	23 (30%)	23	
最も多数を占めてい	1500円	20 (25%)	20	
るのは1000円—1500円	2000円	9 (11%)	9	
	2500円	5 (6%)	5	
の23名(29%)これ	3000円	3 (4%)	2	1
	3500円	1 (1%)	0	1
について1500円—2000	4000円	3 (4%)	2	1
	不明			
	計	79 (100%)	76	3

の20名(25%) 500円—1,000円の14名(18%)という
 順序である。

この収入は総収入から クラシ代(1円)と、のり代(50円)
 を差引いた純益であり、各自によつて1個の純益は一樣
 ではない。つまり1円仕入で10円という者、11円
 で仕入し、18円を売る者、13円仕入で18円をう

る者等、仕入場所や売る当人によつて、それぞれの商いが
出るわけである。仕入れ方は全部現金拂いで直接買い取
つて来て賣るのであり、売れ残りの場合でも各自が買取す
るといふ形態である。従つて、靴店さや新聞売りの場合に
危惧を感じて雇用関係従業員関係のものは見当らなかつた。

8. 仕事の動機

仕事の動機は、靴店さや新聞売りの場合は、家計補助のた
めと自活の爲との割合100%を占めているのであるが、納豆
売りの場合は娯楽や小

遣を何分で生み出す爲
の者が大部分である。
義務教育を捨てて生計

	計	男	女
家計補助	10 (10%)	10	
娯楽の爲	44 (57%)	42	2
貯金の爲	3 (4%)	3	
小遣がほしい	22 (29%)	21	1
合計	79 (100%)	76	3

の爲に何かねば生々る事の出来ない者。たとえ学生中のもの
でも生計補助の爲に労力の比重がかつてゐる者が多い。新
聞売りや、靴店さよりは、いくゝ恵まれた環境にあるもの
と思われる。

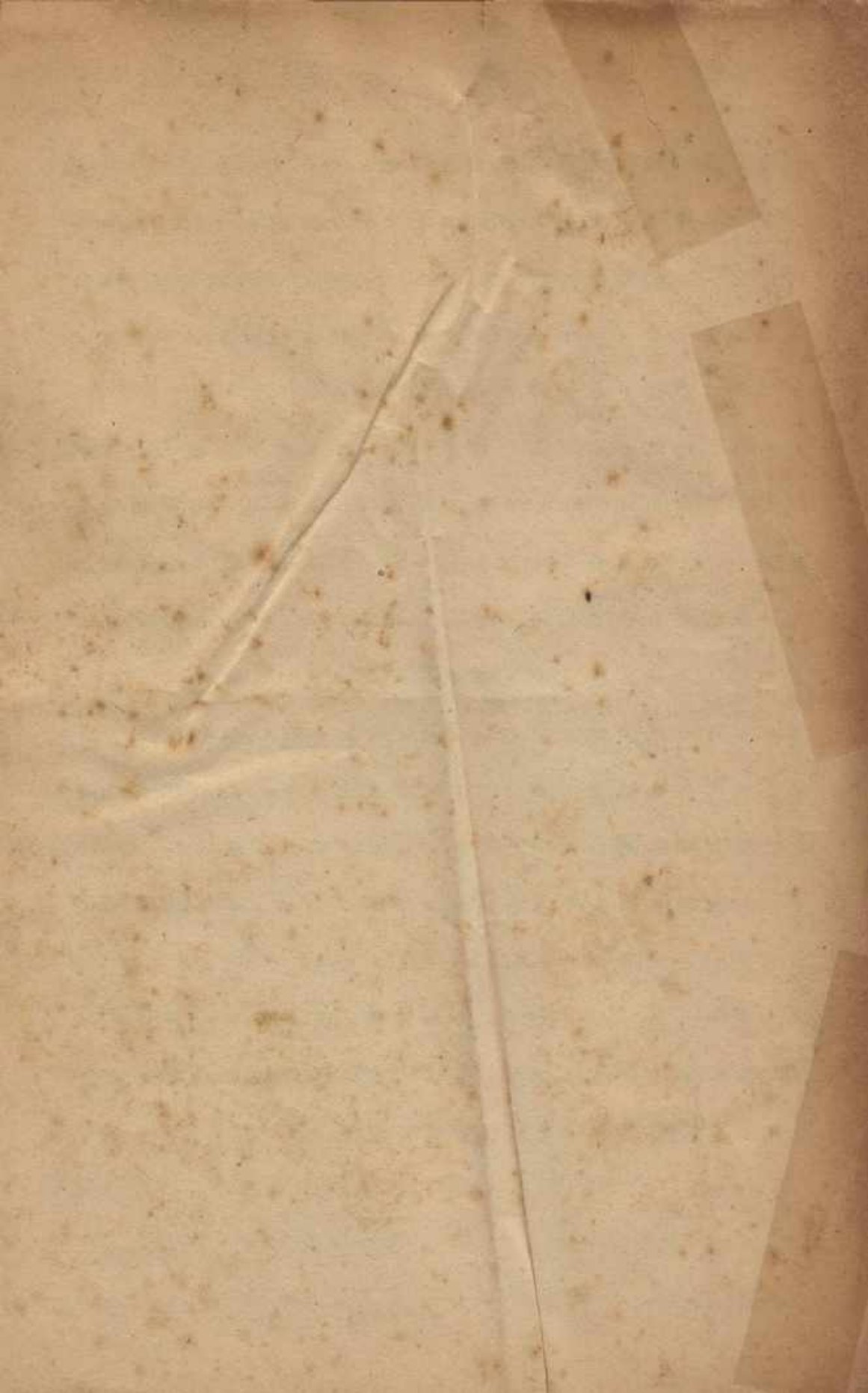
まとめ

以上が納豆売りの調査結果の概要である。これによつて娯楽の
ためという者が55%、小遣がほしいからという者が29%、
貯金する爲と云う者が4%と、これらの目的をもつる者が大
半以上を占め、家計補助の爲というものが12%程度である。
これによつて、納豆売りの年少者は靴店さや、新聞売りの

子供と違つて、先ず学校之通う爲に切^けているという一害に
つぎるものと思われる。そして労働時間(ノ部^のものを除いて)労働環境の悪から起つて、老人に問題になる虞は
なく、甚しく、どうしても切^けかねば学校之行けない子供達に
とつては悪まれた仕事であるとみられる。

と云ふ小売価格が少し高いので、費^かれゆき^が悪く、従つて子供
同士の競争がほげしく苛^これる程、必要以上の労働力を
消費してしまふ結果を生ずること、生活にも就学にも困ら
ない家庭の子供が自由に使える小遣^{こづかい}が欲しがつたり、学校貯
蓄^{ちゆうこく}の想^{おも}ひといふような動機から、軍に及重^{おび}がやつてい
るから自分もやるといふ者が、簡単にやりやすい可能性を多分
に含んでいる仕事であり、また事實をういう者が相当居る
こと、その結果本當に窮乏^{きゆうぱん}をやらなければ学校に行けない
という貧困^{ひんこん}家庭の年少若童^{せうしやくどう}の仕事が、これらの子供達の増
加によつて侵^おかされるということである。

ともあれ、どうしても切^けかねば学校之通うことのできない
年少若童にとつては、この仕事は、労働條件、労働環境の悪
からも一応悪まれた労働形態であらう。



新聞發表

昭和二十五年二月十三日午後一時
労働省婦人少年局發表

納豆賣の少年少女の実態

労働省婦人少年局では、昨年十二月から本年一月にかけて、東京都内の納豆賣の年少者について、実態調査を行い、この様調査の結果がまとまった。都内の納豆製造組合に加入している業者は、大体五〇名で、休業しているものや、年少者の来ないものなどもあるが、三〇〇名位の年少者が集まるという状況であった。もちろん、これは都内の納豆賣の全部の数ではない。実際に調査された者は、七九名で男七六名、女三三名であった。最低年令は十才で、十五才の者が最も多く、小学校四年生的一名を除いて、全員が通学している。両親又は片親のない者は約三割である。さらに調査した靴磨や新聞賣の場合、都内で三割は本人が生計の中心であったが、納豆賣の場合は三割に過ぎない。労働時間は一時間から三時間のものが八割に近く、一ヶ月の収入は、大体五〇〇円から四〇〇〇円である。

ただ、納豆賣の場合は、學費や小遣かせぎ、學校貯蓄のためというのが大部分で、家計補助のためというものは一割程度に過ぎない。納豆賣をしなければ、最低限必要な學用品も買えず、P・T・Aの會費、給食費なども拂えないという者もあるが、業者も云っているように、生活に困らない家庭の子供が相当働いている。これらの子供達は、學用品や野球用具を自由に買いたい、學校貯金をせよといった自由に使える小遣が欲しいというふうな動機から、友達がやっているからというところまで一種の流行的な考えから始めている場合が少なくない。なかにはジャケツを買ったと比んでいる者、今度はグローブを買うんだと楽しんでいたりする者もいた。納豆賣の数が極めて浮動性であるのもこのように大して切實な動機に因らないものが多いことも一つの原因であろう。その結果、どうしても納豆賣をしなければ、學校に行けない貧困家庭の子供達の販路を侵し、お互に競争をはげしくして賣行きを悪くしている。また年少者の進出が大人の納豆賣を逐もっていることも一般的现象である。ともあれ、靴磨や新聞賣のように雇用されている者や身分的従属関係にあるものはなく、中間搾取やボスの介在もみられず、労働時間や仕事の軽易な点などからも、年少者が通学しながら働く労働としては、比較的條件に恵まれた街頭労働であると云えよう。

